“聴きどころ”に溢れた稀有の奏者
ユリア・フィッシャー

©Felix Broed

1983年ミュンヘン生まれというから、ユリア・フィッシャーは今、36歳。もはや新進と呼ぶには当たらず、業績や芸格から、すでに中堅と認められてよいこの人は、疑いもなく世界中のファンから、これからの時代を担うヴァイオリニストの一人と考えられている。

ゲルマン系（ドイツ）とスラヴ系（ロシア）の血を継いで生まれたユリアは、4歳の時から母にピアノのレッスンを受け、ヴァイオリンを習ったのは9歳で、ミュンヘン在住の名教授アナ・チュマチェンコの門に入って後である。その後程なくヴァイオリン演奏にいちじるしい才能を認められた彼女は、ドイツの待望する若手ヴァイオリニストとして、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管を初め、ドイツ内外の一流オーケストラとの共演を重ねるようになる。そして、ユリアの才能には、ひとつの驚くべき特技が伴っていた。ヴァイオリンを始める前すでに完成された少女ピアニストとなっていた彼女は、ヴァイオリンに熟達してからもピアノの弾奏を止めず、2008年25歳の時にはフランクフルトで、グリーグのピアノ協奏曲を弾いているのである（ちなみに、同じ音楽会で、ユリアはヴァイオリンをとり、サン＝サーンスの第3協奏曲も弾いてのけた）。

彼女はまた、室内楽演奏にもただならぬ興味を寄せ、2011年には自ら弦楽四重奏団を創設している。更に室内楽演奏の面でも、彼女は時にヴァイオリン、時にはピアノを受持つのだ。

さて、そのようなユリア・フィッシャーは、どのようなヴァイオリニストだ、と言えるのだろうか。これまでに聴いた来日時のコンサートやCD録音を通じて抱く私の個人的感想は、彼女は音楽的にきわめて均整の取れたヴァイオリニストだ、ということである。音色にしても、また歌いくちにしても、法外な個性的魅力で聴きてを圧倒し、魅惑し尽くすようなアーティストには、彼女は属さない。しかし、では彼女は魅力に欠けたヴァイオリニストなのかと言えば、けっしてそんなことはない。それどころか、これほど"聴きどころ"に富んだ演奏を展開するヴァイオリニストは、世に稀だと言わねばならない。つまり、彼女は、楽曲のどのフレーズ、どの音符に対しても細やかな心遣いを示し、そこから微妙な表情を引き出す技に、すこぶる長けている。アーティキュレーション（ある手法を用いてフレーズを特色づけるやりかた）、アゴーギク（小節内の微妙な音符の伸び縮み）、ダイナミックス（強弱法）といった、表現法の極意に関わる技術を、彼女は、あたかも自然と身についた"身だしなみ"といった趣で、なんらの誇張も、こだわりもなく、"当たり前"に聴かせるのだ。

上記のことは、彼女がヴァイオリンのみならずピアノの演奏にも優れ、更には室内楽にも深く関わってきたことと、疑いなく直結している。ひとつの言い方をすれば、ユリアは単にメロディーを歌

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie